

## 人の息吹の感じられる芸能として、 素手と身体を使って、自分たちで道を作っていきたい

劇団かかし座は、創立以来60年以上に渡って、様々な素材や道具、手などを使って影絵による総合パフォーマンスを創作してきた。そしてさらに手の可能性を追求して、手影絵のみで構成された“Hand Shadows ANIMARE”を制作し、国内外でも高い評価を得て、どの公演先でも笑顔と暖かい拍手に包まれている。代表の後藤圭さんとパフォーマーの方々に話を聞いた。

「手影絵の魅力は、人間の根源的なところにあると思います。はるか昔の人類の祖先は、洞窟の中で火をたいて壁に映った影で、遊びをするようになった。この記憶がずっとわれわれの遺伝子の中にあるはずですから人間はどここの国でも手影絵が大好き。これを現代の芸能として創作したのが、“Hand Shadows ANIMARE”なんです」

“ANIMARE”とはラテン語で“生命を吹き込む、元気付ける”という意味。パフォーマンスは4人で行われ、いろいろな動物や鳥などを手だけで演じ分ける。パフォーマーにとって一番大切なことは？

「手影絵は、スクリーンと光源の狭い空間

の中で、4人がみんな同じイメージを共有して、お互いの呼吸と気配を感じながら息を合わせて手に生命を吹き込んでいきます。まずは、それぞれの手の形と動きがしっかりと決まっていなければならない。さらに動物の重量感、そして心音や息づかいが聞こえて、筋肉の躍動感のようなものまで手だけで伝えます。それには、演じる動物の形や動きの特徴を徹底的に研究するだけではなく、お腹がすいたときや眠い状態をどうやって手で表現したらいいのか、とにかくイメージを膨らませて動物の気持ちになりきって、稽古を繰り返します。手を微妙に曲げたり伸ばしたり、スクリーンに頭が映らないように身体を反り返せたり、それはそれはいろいろ試行錯誤しています(笑)」

“Hand Shadows ANIMARE”の公演は約1時間。手の表現力と足腰の鍛錬、そして何よりも集中力が必要だ。

「人は誰でも手を持っていて、手影絵は世界中で行なわれています。手の表現力は演じれば演じるほど、可能性を秘めているの

がわかってきました。手影絵のアンサンブルは世界でも余りありません。だからこそ、人の息吹の感じられる温かみのある芸能として、素手と身体を使って、自分達で道を作っていきたいですね。昔からある人間的な手影絵と最新のCGなどもバランス良く組み合わせて、現代に生きる素晴らしい芸能として、楽しみながら、常に何かしら新しいことに挑戦しようと思っています。この手に限界はありません」



PROFILE 1952年に日本で最初にできた現代影絵専門劇団。影絵を通じて人々の心を無限の想像へと誘っている。舞台活動にとどまらず、テレビ、広告、映像、出版などの分野でも活躍。20年ほど前から手だけで動物や鳥などを表現する手影絵を作品に取り入れるようになり、2009年に手影絵のみで構成された“Hand Shadows ANIMARE”を制作し、ドイツで開催された国際影絵劇フェスティバルに参加。以後、各国で公演を行ない、人気を博している。手の表現の可能性を追求し続けている。 <http://www.kakashiza.co.jp/>



Photo / Ko Hosokawa

Hand Shadows Animare  
手影絵

劇団かかし座

Shadow Play Theatre KAKASHIZA